

変わりゆくもの、大切なもの

岩手県立遠野緑峰高等学校 生産技術科 3年 大原 達也

私の実家は岩手県の遠野市大野平にあり、祖父母が乳牛を20頭ほど飼育して、曾祖父の代から続く牧場を経営していました。曾祖父は新潟県に生まれ、満州開拓団として中国に渡りましたが、敗戦後岩手県庁に勤務していた元満州開拓団団長からの声かけにより、大野平の地を開墾したと聞いています。大野平は、早池峰山麓の標高500メートルに位置した高冷地であり、気象条件が厳しい土地です。もともとの地力が低かったため、ヤギ、羊、鶏の糞尿の還元を行って地力の培養に尽力したそうです。牧草地の土壌改良に力を注ぎ、過去に農業祭参加第14回全国草地コンクール東日本ブロック賞を受賞し、テレビCMの撮影をしました。

しかし、東日本大震災の原発事故による放射線の影響で刈った牧草は全部牛に与えることができなくなり、東京電力の補償ということで外国産の牧草を与える毎日になりました。

私は保育園の頃から、餌を与えたり、ミルクを作って赤ちゃんに哺乳したり、牛と関わりながら育ちました。小さい頃は、自分より体の大きな子牛や乳牛を怖いと感じたこともありました。ほ乳瓶を持つ私に子牛がすごい勢いで群がってくると、及び腰になってしまうこともありました。

牛について何でも分かる祖父は、私の憧れでした。成長するにつれて、私も将来は祖父のように牛の世話をし、牧場を経営したいと考えるようになりました。また、子供の私の目から見ると、祖父母は自分のペースに合わせてのんびりと楽しそうに酪農をしているように見えました。

私が中学2年生のある日、事件が起きました。牛舎の2階から祖父が足を滑らせて転落し、大怪我をしたのです。祖母が亡くなってから一人で酪農をしていた祖父にとっては、もう牧場を続けていくことが難しくなりました。

ある日、祖父が
「牧場の牛は、全部よその牧場に渡したから。」
と言っているのを聞きました。最初はことばの意味が分からず、信じるできませんでした。それまで当たり前だった日常が突然なくなりました。今思えば、大切な牛たちを手放した祖父の方が私の何百倍も辛い気持ちだったはずです。祖父は、半年後には歩けるぐらいにまで回復しました。

私には高校入学当時、夢がありました。それは、いつの日か実家に新たに牛を導入し、祖父の牧場を復活させることです。その日のために、牛について基礎・基本を学びたいと考えた私は、地元で農業科目を学ぶことができ、牛を飼育している緑峰高校へ進学する

ことに決めました。

本校では「乳牛」ではなく「和牛」を飼育しています。和牛は乳牛に比べると大きさも小さかったので、これまで乳牛と接してきた私は心の中で「これならいける！」

と思いました。1年次は、草花や野菜、果樹など様々な分野も実習しましたが、畜産の実習日をいつも心待ちにしていました。

また、2年次から研究班に分かれて学習するのですが、私は迷わず牛について専門的に学習できる「作物畜産研究班」を選びました。乳牛と触れ合うことはできないのが残念でしたが、牛に関する勉強ができたのは嬉しく、畜産の奥深さを感じました。

昨年、農業クラブ県大会で家畜審査競技・乳牛の部に出場することが決まり、市内の酪農家さんで勉強をさせていただきました。久しぶりに乳牛の香りをかぎ、我が家の牛たちと過ごした日々を懐かしく思い出しました。雫石町の共進会に合わせて開催された農業クラブ県大会家畜審査競技では、リードマンと意思疎通しながら美しく歩く乳牛の姿に釘付けになりました。どの牛も美しすぎて、正直見分けるのは難しかったです。研修を通して学んだことや先生から教わったこと、そして数年前まで乳牛と過ごしてきた自分の直感を信じて競技に臨みました。残念ながら入賞はできませんでしたが、審査員の方から解説をいただいた際に、幼少期に毎日牛を眺めていた経験が生かされていると実感できました。

去年の夏、私の夢を家族に伝えました。そして、祖父はこう言いました。

「牛、とっておきゃ良かったなあ。」

残念そうにつぶやく祖父の姿を見て、私も同じ気持ちになり、そう伝えたことを少し後悔しました。母は何も言いませんでした。

あれから月日が経ち、私の高校卒業後の進路は就職になりました。地元で製造業の仕事を希望しています。今でも時折、牛と一緒に過ごした日々を懐かしく思い出します。あの時、祖父が牧場を続けられたら、私の人生は違うものになっていたのだろうか…、そう考える日もあります。

しかし、私がこれまでの経験を通して学んだことが消えることはありません。乳搾りが上手くできなくて残念だったこと、家族で牛の出産に立ち会い「大きなカブ」みたいにみんなで協力して引く張ったこと、エサやりをしている最中に牛が逃走したこと、休みの日には手伝いにいき牛と触れ合った日々、学校帰りに毎日眺めた牛たち…、数えだしたらキリがありません。全てが私の日常で、そこには変わらない何かがあります。

私は酪農の良き理解者として、今後の人生を歩んでいきたいと思えます。

私が強く望むこと、それは本当に牛が好きで酪農を続けている人たちが、本当に辞めたいと思うその日まで仕事ができる環境や制度ができること。誰かが築き上げてきた

酪農経営が困難にあった時、サポートがもらえる日本の酪農であり、農業であって欲しいのです。新規就農者を増やすことも大切です。それ以上に、今続けている人たちを大切にすることの方が何倍も重要なのではないのでしょうか。そして、経営者が身体を壊すような酪農では意味が無いと私は思います。無理をせず、のんびりと自分のペースで楽しく続けられる酪農であって欲しい。動物や自然と共に過ごす当たり前の日常が酪農および農業にとって、一番尊いものなのではないのでしょうか。そういうものであって欲しい、それが私の願いです。

「じっちゃんにもっと酪農を続けさせてあげたかった、そして自分が後継者として酪農経営をしてみたかった。」

私の願いや思いは、いつか何かの形で誰かを支える力になるかもしれません。私には遠い夢となってしまいましたが、この夢を抱いた幸せな日々を大切にしながら、酪農の良さ理解者として、今後の人生を歩んでいきます。

ご本人による朗読を
こちらからお聴きになれます。

